

一八九八年のタブリーズにおけるパン騒動

岡崎正孝

はじめに

大きな政治変革に連なる時期に庶民がどのような生活条件のもとに置かれていたかを知ることが、政治変革の要因を探る上で極めて重要である。一九七九年のイラン革命が宗教的要因のみで説明されないことは、言をまたないことであり、宗教指導者に指導された蜂起が成功したのは、その前提に生活に対する民衆の大きな不満があった点を無視・軽視することはできない。

一九〇六年、反専制の運動が功を奏し憲法が制定され、イランは専制君主政体から立憲君主政体へと移行した。「立憲革命」としてイラン近代史上画期的な事件とされているものである。憲法制定の要求はインテリや大商人によってなされたものであり、一般民衆には「立憲」は無縁であったはずであるが、運動は成功した。ではその要因は何であったのか。

世紀末から革命に至る時期、都市の民衆の生活を脅かしたのは、食糧問題であった。しばしばパン価格は異常に高騰し、思惑買いにより小麦は品薄になった。その影響をもっとも強く受けたのは、都市の低所得層であった。一八八〇年代以降、エスファハーン、タブリーズ、シーラーズ、テヘランなどの大都市は激しいパン騒動を経験した。社会不安が町を覆い、権力に対する抵抗としてのバスト(後述)が頻発した。そして、都市の一般民衆はこの時期の政治運動を「安いパンのための運動」、設立された国民議會を「穀価決定のための會議」と理解していたほどである。①このような社会経済情勢は「革命」の成功と無関係ではなかった。

イラン西北部のアゼルバイジャンはこの国の穀倉地帯である。ちなみに、一九七三年の農業センサスによると、当州の小麦の生産高は全国生産の二〇%を占め(人口比は二三%)、この国第一の小麦の生産地となっているが、当時もアゼルバイジャンは小麦

の主産地であった。農業統計の欠如のため、地税で見ると、この州の税額は全国の一八%を占めていた（一八八八―一八九九年）。

殺倉であるアゼルバイジャンの州都タブリーズにおいても、

この時期パン問題が深刻化した。ナーセレットディーン・シャール暗殺（一八九六年）前ころには、パン価格は恒常的に高値を続け、英領事報告は、タブリーズの下層民は餓死寸前であった、と伝えている。② また、アフマド・キャスラヴィー（一八六九―一八九〇年生まれ）によると、彼の子供の頃、先を争ってパンを買い求める男女でタブリーズのパン屋は喧騒を極め、彼らの叫び声は遠方まで聞こえた。パンを買うには通常、三―四時間もかかったという。③

当時の社会情勢はパン騒動に凝縮されており、パン騒動研究は「立憲革命論再考」への手掛りを与えるものであると筆者は考える。④ 騒動にはすべての都市に共通する要素があるが、差異も認められ、権力側の対応にも違いがある。したがって、各都市における騒動の実態を比較考察することが必要である。

資料事情より、実態の把握には都市によって濃淡がある。タブリーズについては資料が乏しく、英外交文書とイラン人政治家のメモワールを断片的にしか利用できないが、本稿では、一八九八―一九九年のタブリーズにおけるパン騒動をとりあげる。世紀末に

における重要事件の一つであるネザーモル・オラマー邸襲撃事件を中心に、タブリーズ・パン騒動の特徴、政治権力の実態の一端をあきらかにしたい。

パン騒動については、シーラーズ騒動が最も興味深く、かつ資料にも恵まれている。筆者が現在進めている「前立憲革命期におけるパン騒動の研究」はシーラーズ騒動が中心になるが、本稿はエスファハーン騒動およびテヘラン騒動とともに、その一章をなすものである。

本稿で使われる度量衡は以下の通り。

（重量単位）

マン (man) = 約三キログラム

ハルヴァール (kharvār) = 一〇〇マン = 約三〇〇キログラム

（通貨単位）

シャーヒー (shahi)

アッバシー (abbasi) = 四シャーヒー

ケラーン (gerān) = 二〇シャーヒー

トマン (toman) = 一〇ケラーン

一八九九年における英ボンドとの交換レートは次の通り。

q1 = 52 qerān (AP, 1904)

① W. M. Floor, "The Creation of the Food Administration in

Iran," *Iranian Studies*, vol. 16 (1983), p. 212; Yahyā Doulatābādī, *Tarīkh-e Mo'āser yā Hojāt-e Yalyū'ā* (Tehran, n. d.), p. 84.

② Great Britain, Parliamentary Papers, 1897, XCII, Accounts & Papers, Diplomatic and Consular Reports (以下 DCR と略記), AS, 1968.

③ Ahmad Kasravi, *Tarīkh-e Mashrūh-ye Iran*, 5th ed. (Tehran, 1340/1961), pp. 140-42.

④ パン問題に関しては、フローの論文(前記)が先駆的なものである。

ネザーモル＝オラマー邸襲撃事件ーパン騒動と

宗教指導者

一八九八年八月、タブリーズで大騒動が発生した。この年、全国的に穀価・パン価は高騰し、ファールスにおいても早魃とイナゴの害により五月二日にはパン価は、一マンあたり四〇シャーヒーになった(もともと、五月末には大量の小麦が入荷し、半値の二〇シャーヒーに下がった。①一月は二六シャーヒー)。タブリーズでも事態は深刻で、八月二九日の報告によると、パンは一マンあたり三〇―三五シャーヒーにまで高騰した。②

高価格に加えて、パンの品質も極度に悪化した。騒動時にタブリーズに滞在していたシャーの側近(侍読も務める)エエテマール・ドゥ＝サルタネ (Mohammad Hasan Khan Marāghē'i, E'temād al-Saltaneh) は「タブリーズのパンは、およそパンと呼べるもの

ではなく、二日たっても乾かなかった」と述べている。③イランでは小麦パンを常食とし、大麦は一般には飼料とされる(したがって、用途の異なる小麦と大麦をまとめて「麦類」として扱うことは、食糧問題を考える場合には妥当ではない)。不作時には、大麦粉や豆粉も使うが、野菜や草木の葉を粉にしたものとか、ぬか(gabus)、さらにはおがくず (thak-e are) や灰 (thak) を混ぜることもあった。普通の小麦パンだとすぐに乾くが、このような混ぜもののあるパンはいつまでもねばったままであった。この時のタブリーズのパンも同様であり、「タブリーズのパンはおよそ人間の食べ物ではなかった。④」

政情は悪化し、反知事派の宗教家(モッラー)たちはモスクのミンバル(説教壇)の上から穀物を退蔵している者たちをきびしく非難した。⑤騒動が発生した。八月九日朝、タールレブ(神学校学生)をリーダーとする女性を含む群衆がパン屋を襲い(イランでは女性も積極的にデモに参加した)、店を壊し、パン屋を閉店に追込んだ。同日午後には、セイエド(預言者モハンマドの子孫とされる人)を先頭に子供と女性も含む群衆が棒を手に市内をデモ行進した。⑥

イランにも聖所避難の法慣行がある。避難所をバスト (bast) といい、避難する行為をバスト・ネンヤスタン (bast neshastan

「バストに座る」の意、また単に「バスト」ともいう。本来は、犯罪人が「保護を求めるため」「難を避けるため」のものであり、モスク・聖者廟・有力な聖職者の邸・王宮の厩舎や厨房などがバストとして認められていたが、一九世紀後半になると、「抗議のため」の政治的バストが多くなった（その起源も古い）。外国の公館や電信局などもバストとなり、政府や役人に対する抗議のため人々はしばしば、モスクのほか、外国の公館へもバストするようになった。^⑦

他の都市では、パン騒動時には電信局とモスクへのバストが一般的であったが、タブリーズの人々はロシア領事館をバストに選んだ。シャーに大きな影響力を行使しえたロシア公使を通して事態をシャーに伝えようとしたのである。シーラーズの例でみると、有力な宗教家が騒動を支持し、自らのモスクにバストさせているが、タブリーズにはこのような宗教家が存在しなかったことが、彼らをロシア領事館に向かわせた要因の一つであった。政治的バストは一般民衆にデモンストレーション効果を与えたため、非常に有効な抵抗手段であった。

しかし、このバストは成功しなかった。民衆は領事館を警備していたカルエベイギー（*Calaf Beygi*、守備隊長^⑧）のハビーボラー^⑨・ハーイン麾下のファッターシユ（守備兵）に追いつ返されてしま

った。一日にも群衆はバザールに押しよせ、バザールを閉店に追込み、別働の数百人がロシア領事館に向かったが、再びカルエベイギーに押し返された。^⑩

町は不穏な状態に陥り、夜暗くなってから町を歩くには、合い言葉を必要とするほどであった。八月中旬になっても、バザールの店の半数は閉じたままであり、町の九〇軒のパン屋のうち営業していたのは僅か九軒という有様であった。^⑪

民衆は鋒先を、タブリーズの有力なセイエドで大土地所有者でもあったネザーモル^⑫・オラマーに向けた。八月二三日、数人のパン屋が彼の家に行き、小麦の放出を依頼したが断られたのを契機に、民衆の反ネザーモル^⑬・オラマー感情は一挙に燃え上がった。

翌二四日、群衆はネザーモル^⑭・オラマー邸に押し寄せた（この時の指導者は不明）。ネザーモル^⑮・オラマーが自分の持村から警備のため呼び寄せていた私兵が群衆に襲いかかり、大騒動となった。私兵は群衆に向かって発砲し、二時間ほど続いた衝突で一五—一六人の死亡者がでた。^⑯ これまで静観していたピーシユカール（知事代理）のামীレ^⑰・ネザームは死亡者がでると軍隊を出動させ、騒ぎは一応は収まった。^⑱

翌日明け方、ふたたび群衆はネザーモル^⑲・オラマー邸を包囲した。しかし、前夜のうちにネザーモル^⑳・オラマーと弟たちは、有

カ宗教家の一人 (Haji Mirza Musa Segat al-Balam) の助けをかり、貴重品をもって逃げ出していた。群衆は掠奪をほしいままにし、家を完全に破壊し、火を放った。彼の弟 (Alia al-Molk Nezam al-Douleh) や甥 (Segat al-Douleh) の家も襲われ、破壊された。^⑤ 邸の前の通りは掠奪品を手にした人々でごったがえしていたといふ。^⑥ 駐露大使も務めた弟のフラーオル・モルクは帰任時にムテルブルグから持ち帰った高価な家具も含めてすべて掠奪された。掠奪品は二〇万トマンにも達した。^⑦

この事件は大量の小麦を所有していた他の有力宗教家たちにも大きな不安を与えた。たとえば、大地主でもあったハジ・キヤリーム・アガー (Haji Karim Agha) も急拠町を去り、^⑧ ネザーモル・オラマーの取り巻きの者たちもすべてタブリーズから避難した。^⑨ 騒ぎは収束した。しかし、ムン不足と庶民の生活苦は変わることはなかった。

- ④ *Vaq'et-ye Ehsafat'iyeh: Majma'at-ye Gozreshahā-ye Khofiyeh-nevustā-e Engeltis*, ed. Sarfai Shirāni (Tehran, 1352/1983), p. 545.
 ⑤ Fo, 60/598, Tabreez, No. 15, August 29, 1898. 統計上の不足に依りこの時期のデータは得られませんが、一八九一年のラシヤットの例をとると、労働者の日当は一ケラーン(二〇シャーヒー)にすぎなかった。一人当たり小麦の年間消費量を五〇パン、一パンあたり二〇シャーヒー

① (一・五ケラーン)とチレン・ムン代のみで年に七五ケラーンとなる。DCR, 1189, Resht, 1891.

② Haji Mokhber al-Salehneh-ye Hedāyat, *Khāterāt va Khāterāt* (Tehran, 1363/1984), p. 90.

③ "Chand Sanad darbare-ye Gerāni-ye Sāl-e 1316 Qamari dar Tehrān," *Yek Šud va Panjāh Sanad-e Tārīkhī*, ed. Sarhang-e Jahāngir Qā'em Maqāmi (Tehran, 1348/1969), p. 356; Hedāyat, p. 109.

④ Kasravi, p. 140.

⑤ Fo, 60/598, Tabreez, No. 14, August 15, 1898.

⑥ 拙稿「抵抗と直訴の社会史—イラン・イスマラム社会と聖所避難」『同朋』一四五号(一九九〇)一〇—一二頁。なお、ムストについては、嶋本隆光「ムスト考」『キリエン』二八巻二号(一九八五)三五一—四九頁、増野J. Calmard, "Bast" *Encyclopaedia Iranica*, vol. 2, pp. 856-58 などを見参照。

⑦ カルヘン・イギーは市の役人の一人で、al-Ma'raser va al-Asar (ed. Haji Ashar, 1984, p. 423) の「タブリーズ市」(Hokumat-e Shahr) の頁(p. 423) 以下に、カルヘン・イギーは Beiglarbeigi, Kalantar, Nā'eb-e Beiglarbeigi の次に位置づけられた。

⑧ Fo, 60/598, Tabreez, No. 14.

⑨ *Ibid.*

⑩ Kasravi, p. 142; Fo, 60/598, Tabreez, No. 15.

⑪ *Khāterāt-e Kolonel Kasakofski*, tr. Abbas Qoli Jalilī (Tehran, 1344/1965), p. 252. (以下 Kasakofski の略記)

⑫ Fo, 60/598, Tabreez, No. 15; Kasakofski, p. 252.

⑬ 一八八〇年、ミールザ・ホセイーン・ムンが失脚した時 (Tazir-e Omur-e Kharejeh va Sepahsānari) を能免(ヤウ)でケラーンに滞在し

ていた吉田正春（明治政府によりイランに派遣された最初の日本人）は、群衆がその邸を掠奪した有様を目撃している。拙稿「明治の日本とイラン——吉田正春使節団（一八八〇）について——」『大阪外国語大学学報』七〇—三号（一九八五）、八〇—八一頁。

⑮ FO, 60/598, Tabreez, No. 15, Kasakofski, p. 252.; Floor, p. 205.

⑯ FO, 60/598, Tabreez, No. 21, September 19, 1898.

パン騒動の主因—小麦の退蔵

イランは沙漠の国であるが、豊かな農産物に恵まれた農業国である。一九七〇年代の高度経済成長期に小麦の輸入国に転じたが、それまでのイランは小麦の余剰を有していた。パン騒動時ですらかなりの量の小麦がペルシア湾諸港から輸出（密輸）されていた。農民も小麦の年間消費量を知らないが、これはイランでは食糧問題が重要な問題ではなかったことを物語る。

筆者はかつて、一八七〇年の大飢饉も小麦の絶対的な不足に起因するものではなかったことを論証したが、今回のパン騒動も同様であった。「ペルシアでは小麦の買い占めは日常茶飯事であり、パンの値が飢饉価格になると、タブリーズでもしばしば騒動が起った。犠牲になるのは常にパン屋で、パン焼き釜で生きたまま焼かれることもあった。人々はパン価の高騰は買い占めによるとみなしており、騒ぎは激しくなった」と元駐テヘラン英公使館付

陸軍武官 T・E・ゴードゥンは述べているが、今回の騒動も例外ではなかった。⑯

アゼルバイジャン州知事の皇太子モハンマド・アリーは、アゼルバイジャンにおける小麦不足は地主たちの売り借しみに起因するものであるとシャーに報告しているが、この時期のパン騒動のほとんどは退蔵によるものであった。⑰

ネザーモル・オラマー邸襲撃は象徴的な事件であった。それは小麦の価格操作と退蔵に対する民衆の抵抗であった。ネザーモル・オラマーは七万ハルヴァール（約二万二〇〇〇トン、一四万人分の年間消費量にあたる）の小麦を退蔵していたと言われている。この数値は誇大であるとしても、彼が大量の小麦を退蔵していたことは事実であり、退蔵をシャーは黙認していたという。⑱

ネザーモル・オラマー (Nezām al-Olamā Mirzā Mohammad Rāfi Tabātabā'i b. Mirzā 'Alī Asghar Mostoufi) はタブリーズで最も有力なセイエドであった。父のミールザー・アリー・アスガルはモストウフィー (Mostoufi 会計官) にすぎなかったが、彼の代になって知事のモザッファレディーン皇太子にとりいり、アゼルバイジャン州のハーレセ地 (Khalesejāt-e shah 王領地) の借地に成功、これにより巨富をなし、この地の有力者にのしあがった。そして、一八七〇年代の終わり頃に Nezām al-Olamā の

敬称(ラカブ)を授与された。また、子のナーセロツ・サルタネ(Nāser al-Saltāneh Mirza Nasrollāh Khān)もモザッファレディーン・シャーの治下でテヘランとアゼルバイジャンのハーレセ地の管理をし、莫大な富を手にした。統計がなく所有規模を具体的に知ることはできないが、ネザーモル・オラマー一族は広大な土地を所有したのみならず、王と皇太子との関係も密で、タブリーズにおける小麦取り引きに大きな影響力をもっていた。

この騒動の三年前の一八九五年八月三日(一三二三年サファル月一日)にもタブリーズでパン騒動が起きた。タバータバयी一家に属するビーシュカールのカーエム・マカーム(Mirza Abd al-Rahim Khān Gā'em Maqām)は抗議に押し寄せた群衆に発砲を命じ、二〇人(三〇人ともいう)が殺された。怒った群衆はロシア領事館に遺体を運び、バストした。情勢は不穏になり、カーエム・マカームは皇太子の宮殿に逃れざるをえなかった。この騒動でもパン価高騰の元凶はネザーモル・オラマーとその一族とみなされており、彼らは騒動が収まるまで半月ほど町を離れ、難を避けることを余儀なくされた。^⑦

ネザーモル・オラマー一族は、エスファハーンの有力宗教指導者アガー・ナジャフイーのように、パン騒動時には常に登場する「悪徳」退職者であったが、退職は彼のみの「独占事業」ではな

かった。この年、パン価が上昇を始めるや、大地主たちは自分の持村から小麦を町の郊外まで運び、小麦が「飢饉価格」になるのを待った。タブリーズの州政府の高官や大商人に加え、ネザーモル・オラマー同様、土地を所有する有力宗教家たちもこれに関わっていたし、皇太子自身も退職者の一人であった。^⑧

イマーム・ジヨムエ(金曜モスク Masjed-e Jume'a の導師)のミールザー・ジャヴァード・アガーも退職者の一人であった。イスラム暦二二八八年(一八七一一七二)にナーセレディーン・シャーによりアゼルバイジャンのイマーム・ジヨムエに任命された彼は、タバコ・ポイコット運動時(一八九一一九二年)にはタブリーズにおける運動の指導者として活躍、この地の宗教界の最高の実力者であったが、彼も大土地所有者で、穀物転がしを行っていた。^⑨ゴドゥンによると、彼はロシアによるラシュト・タブリーズ道路建設利権取得に強く反対したが、それは彼自身商業と穀物買い占めに係わっており、この道路が完成すればタブリーズへの食糧の輸送が容易になり、退職による「うまみ」が減ることを恐れたためであるとしている。^⑩一八九六年一月二月(一三二三年シャアバーン月)、死亡した父を継いでイマーム・ジヨムエとなった子のミールザー・アフマド・アガーも父同様「退職」を行い、今回の騒動でも民衆から狙われた人物の一人であった。

- ① 「カーシヤール朝に於けるタシ栽培ヤーハ七〇一七一年大飢饉」『西商トシノ研究』三二号(一九八九)三八一—五五頁。Shoko Okazaki, "The Great Persian Famine of 1870-71," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 49 (1986), pp. 183-92.
- ② T. E. Gordon, *Persia Revisited* (London, 1896), p. 74.
- ③ Hedāyat, p. 99.
- ④ Kasakofski, p. 252; Floor, p. 205.
- ⑤ Nāder Mirzā, *Tarīkh va Jughrāfiyye Dar al-Saltanah-ye Tabriz*, ed. Mohammad Moshiri (Tehran, 1351/1972), p. 241; G. P. Churchill, *Biographical Notices of Persian Statesmen and Notables*, August 1905 (Calcutta, 1906), pp. 69-70; Eñtешan al-Saltāneh, *Khāterāt-e Eñtешān al-Saltāneh* (Tehran, 1988), p. 334.
- ⑥ *Khāterāt va Asmāt-e Hossein Golī Khān-e Neẓām al-Saltanah-ye Māfi*, ed. Ma'sūmeh-ye Māfi (Tehran, 1361/1982), p. 290 (タレ・マフィノ傳記); Seiyed Abū al-Ḥasan 'Alavī, *Rejāl-e 'Asr-e Meshrīfīyat*, ed. Habib Yaghmū'i (Tehran, 1363/1984), p. 117; Melodi Bāmdād, *Tarīkh-e Rejāl-e Irān* (Tehran, 1347/1969), vol. 4, p. 348.
- ⑦ *Rūznāmeh-ye Khāterāt-e E'temād al-Saltāneh*, ed. Taj Afshār (Tehran, 1345/1966), pp. 1026-27.
- ⑧ タム・ロ・ホイロッチ運動期のマガール・ナジャフイーについては、拙稿「一九世紀末イラン社会における宗教指導者—アガール—ナジャフイーを中心た」(『評林』一五卷一九八八—一九九二(四頁))を参照。
- ⑨ FO, 60/598, Tabreez, No. 14; Karavī, p. 140.
- ⑩ 大都市のイマーム・シムトホはシャーが任命したが、実質的には世襲的であった。M. J. Fisher, *Iran from Religious Dispute to Revolution* (Harvard Univ. Press, 1980), p. 138.
- ⑪ H. Ploot, *Biographical Notices of Members of the Royal Family*,

Notables, Merchants, and Clergy, FO, Confidential Print No. 7028, December 1897, p. 7.

⑫ Gordon, p. 24.

アミール・ネザームとパン騒動

アゼルバイジャン州 (Māmlakat-e Āzarbāijān) ①は皇太子を知事とする。②しかし、地方行政の実権を握り、実質的に知事の役割を果たしたのは、皇太子のプーシカール (pishkar) であった。③最重要州の一つであるアゼルバイジャンのプーシカールは要職であり、有力者が任命されるのが常であった。パン騒動時のプーシカールはアミール・ネザーム (Amīr-e Neẓām Garrūsi, Ḥasan 'Alī Khān Sālār-e Lashkar, 1236-1317/1820-1900) ④であった。

彼の先祖(コル下族)はサファヴィー朝以来、政府の要職を占めてきた。彼はコル下族の兵を率いモハンマド・シャーの指揮官として活躍、ナーセレットディーン・シャーの下では外交官として重任され、七二年には改革論者の宰相ミールザ・ホセイン・ハーンに招かれ大臣 (Vazīr-e Favā'id-e 'Annā) になった。八二年にはアゼルバイジャン州知事モザッファレットディーン・ミールザーのプーシカールになり、二年後には軍で第二の地位であるアミール・ネザームの称号を受け、アゼルバイジャンで全権を掌

握した。G・N・カーズンが「ベルシアで最も優れた行政官」と評したように、カーシャル朝下の有能な政治家の一人であった。^④ 彼は一八九一年に罷免されたが、これはロシアの影響力の増大に加え、タブリーズの宗教界との抗争に敗れたためであり、その急先鋒はネザーモル・オラマーであったといわれる。^⑤

彼は九六年にアゼルバイジャンのピーシュカールに再任された。「どの国でも、国の背骨である貧者を救済するために、政府は精力的に手段を講ずるものであるが、アゼルバイジャン、いやベルシアでは一般に、これは問題にならない」と英領事は伝えているが、今回は違っていた。彼は積極的にパン対策に乗り出した。

アミーレ・ネザームは、シャーに電報を打ち、市内の小麦の在庫調査を行い、大蔵者の倉庫を強制的に開け、小麦を適正価格で取用する勅許を得た。^⑥ 大穀物所有者の倉庫調査するには勅令を必要とするほど地方の有力者の力は強かった。しかし、シャーの許可を得ていたにも拘らず、彼はシャーや皇太子の近親者の倉庫に立ち入ることはできなかった。調査を許したシャー自身、アミーレ・ネザームがシャーの近親者の倉庫に手をつけることに干渉したし、皇太子も同じであった。^⑦

暴動の後、二、三日間、州政府は良質のパンを民衆に配った

が、パン屋は僅か九店舗しか開いておらず、民衆の飢えを防ぐには十分でなかった。また、シャーから全権を得た彼はすべての役人と有力者に現金と現物による救済金を課したが、彼のライバルや敵対者は支払いを拒否し、混乱を引き起こした。たとえば、支払いを拒んだ大地主で砲兵隊長のサーエドル・モルク^⑧は投獄され、これが原因で彼の軍隊とアミーレ・ネザームの軍隊の間で衝突が起こり、二人が死亡、二〇人ほどが負傷した。また、市長(Delgardberg)^⑨のイターム・ロリー・ミールザー(Mirza Gohar Mirza)は財を没せられ、前任のミールザー・サーレフ・ハーーン(Mirza Saleh Khan)に取ってかわられたが、後者も現金と現物による賦課金の徴収を避けるべく、マッシュハド巡礼を計画しているほか、多くの役人や金持ちも町を去ろうとしている、と九月一二日付けの英領事報告は伝えている。^⑩

九月中旬には、事態改善のための新たな手段が講ぜられた。まず、小麦の州外移出が禁止された。州都のタブリーズが小麦不足に苦しんでいたにも拘らず、この州の穀倉地帯からは小麦がテランや外国へ輸出されていた。たとえば、タブリーズの後背地サルマース(Salmas)では同じくパン騒動に揺れていたテランや外国へ輸出するための大地主や役人や商人が競って小麦の買い付けを行ったため、小麦の価格は平年の三倍になったといわれている

る。¹⁷⁾ 州外への小麦の流出を防ぎ、タブリーズへの供給の増大と価格の安定を図るための禁輸令は当然の措置であった。

第二は、税制改正である。地税 (malikana) は金納と物納の二本立てになっており、物納分は代金納されるか、徴収された穀物は納税地で大穀物商に売却されていた。また、政府が振り出した手形 (Galt) の決済のかたに使われていた。つまり、現物税分の穀物は州政庁に納入されず、地主や商人が処分していた。この場合の価格 (タスィール *taswir*) は非常に低く設定されていた。当時の小麦の実勢価格は半年でハルヴァールあたり一〇トマンはしていたが、タスィールはタブリーズへの距離において、三―四トマンにすぎなかった。¹⁸⁾

手っとり早く現金による税収を確保するための手段として、他地域でもこの方式がとられてきた。たとえばファールス州では、一八一〇年代から現物分の小麦は一ハルヴァールあたり二トマンで代金納されてきたが、一八九八年一〇月にも九〇年前のタスィールが用いられていた。¹⁹⁾ この制度は大穀物商を利するものにほかならない。

ここでアミーレ・ネザームは、州政庁が納税地で売却するのを止め、現物で徴収し、タブリーズに運んで州政庁がパン屋に放出することに決めた。現物による税額は小麦三七、〇〇〇ハルヴァ

ール、大表一二、四〇〇ハルヴァールであり、これは秋と冬を乗り切るのに十分な量であった。²⁰⁾ これが成功すれば小麦不足は解決するはずであった。

しかし、これらの方策は成功しなかった。他地方でも、とくに南部諸州ではこの時期、幾度となく小麦の外国への禁輸令が出されたが、禁令を無視しベルシア湾諸港からの小麦の輸出 (密輸も含め) は続いていた。アゼルバイジャンでも商人や地主たちは小麦を集荷し、より儲けの大きい他の都市への移出を続けた。

弱小の地主からは現物による徴税がなされた。しかし、州政庁は穀物を輸送するために必要な数のロバやラバなどの駄獣を保有していなかった。政庁は輸送手段を調達しようとしたが、大商人や大地主たちは州政庁による駄獣調達を妨害し、そのため州政庁は徴収した小麦 (*shir*) のすべてをタブリーズに運ぶことができなかった。²¹⁾

一方、大地主たちは現物納令を無視し、ピーンシュカールに抵抗した。ファールス州でもこの年の十一月、代金納の中止・物納令が出されたが、地主たちはこれに反対し、彼らを支持する商人、オラマー、さらに彼らに扇動された農民たちが半月にわたってモスクにバストし、新布告の廃止を要求した。ファールス州知事は物納令を取り下げ、妥協案としてタスィールの値上げ (ハルヴァ

ールあたり三・五トマン)を提案したが、これも拒否され、結局は従来通り二トマンとすることで折れざるをえなかった。^⑧

物納は民衆に恩恵をもたらすものであったが、「勅令による強制がない限り、穀物商を肥やす悪習に戻るであろう」と英領事が伝えている通りになった。^⑨ 実質的な大増税になり、大地主たちの利害に大きくかわかるこの方策は、よほど強い政治力がないかぎり成功しない。おそらく勅令をもってしても、不可能であったであろう。

カージヤール朝下では地方の有力者が強い力を有していたため、知事その権力を思いのままに行使しえない場合が多かった。筆者は『カーナー イランの地下水路』において、「小権力」なる語を使い、この時代の政治権力のありかたを説明したが、この例も政治権力の脆弱性を物語る一つの事例とすべきである。

① カージヤール朝下で州を示す語に Mamlakat, Velāyat と Ayālat の三種があった。史料により異同があるが、*Tārīkh-e Moṭlaqāt-e Nāzerī* (ed. Mohammad Esmā'īl Reḡvānī, 1367/1989, pp. 2139-46) にあると、次のようにある。

- a) Mamlakat
Azarbaijan, Fars, Khorāsān va Sīstān, Kernān va Balūchestān.
- b) Velāyat
Esfahān, Borūjerd va Bahūyārī, Yazd, Khamsch, Hamadan,
Qom, Qazvin, Malayer, Tūyeseḡkān, Nehāvand, Kāshān.

c) Ayālat

Kermānshāh, Kordestān, Ārābeshān, Lorestān, Erāq, Golpā-yegān, Khūnsār, Kamareh, Mahāllāt, Gīlān, Mazarandān.

- ② フガー・モハンマド・シャーの時代とは皇太子はフールス州知事としてシーラーズにいたが、一二三年のノウルーズ(一七九九年三月)、フータ・フリー・シャーはアッバース・ミールザーを皇太子に任じ、アゼルバイジャン州知事とした。これ以降、皇太子がアゼルバイジャン州知事としてタブリーズに赴任することが慣行となった(H. Bussé, *History of Persia under Qājār Rule*, Columbia Univ. Press, 1972, pp. 78, 88-89)。これはタブリーズがフータ・フリー・シャーの統治期にはテヘランに次ぐ重要性をもつに至ったからである。
- ③ pīshkar とは「代理」(ṡayebī, noḡbāsherī)を意味する語であり、行政用語としては、大きな州の知事に任命された王子の知事代理をいう(ただし「正式の用語として」は Karḡozār が使われる。al-Maḡaser va al-Aḡār, p. 420)。この語はその他の官職にも用いられ、Pīshkar-e Māliyeh-ye Mamlakat-e Azarbaijan のような用法がある。
- ④ ファーレン・ネザームはカージヤール朝下で当初はアゼルバイジャン軍、つまり皇太子の軍の最高司令官の官職名であったが、一八三五年以降、皇太子の補佐となり、事実上の知事であった。初代のファーレン・ネザーム Mohammad Khan Zanganeh (d. 1841)の死後、暫くこの職は誰も任命されなかったが、一八四八年にファーレン・ネザームにこの職名が付与された。彼の失脚後、シャーはこの官号の使用を禁止したが、一八八一年に Mohammad Rahīm Khan 'Alā al-Douleh がモクタンマフチヤーン・ネザームの知事代理となり、この職名が与えられた。この一八八四一五(一三〇一)年の Hasan 'Alī Khan の書翰に授与された。A. Amanat, "Amīr(-e) Neẓām Garṡrīf," *Encyclopaedia Iranica*, vol. 1, pp. 965-69.

- ⑥ FO, 60/598, Tabreez, No. 20, September 12, 1898.
- ⑦ FO, 60/598, Tabreez, No. 15; Kasakofski, p. 251.
- ⑧ Hedayat, p. 98; Kasakofski, p. 251.
- ⑨ ネザーキル＝オラマー族のカーニム＝ヤカームの娘婿。前タブリーズ市長。非常に豊かで、大土地を所有する (Picot, p. 116)。
- ⑩ カージャール朝時代の官職名で職務内容が不明のものがぎわめて多く、同一職名でも地方によって職務内容の異なる場合がある。ハイグラル＝イギーヤの一例であるが、タブリーズではこれを「市長」として用いている。al-Mā'āsir wa al-Āsār (p. 423) に「*al-ḥakīm al-Fahmān-e Shahr-e Tabriz* の項で Beiglarbeigi が首位に記されている。W. M. Floor, "The Office of Kalantar in Qajar Persia," *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, vol. 14 (1971), pp. 256-57; 水田正史「十九世紀タブリーズの都市行政官としての覚え書き」『日本中東学会年報』四号（一九八九）、二八一—三〇頁を参照。
- ⑪ FO, 60/598, Tabreez, No. 15, イヤーム＝コロ＝ミールザーはフナターアリー＝シャヤーの孫（一八四八—四九年にアゼルバイジャン州知事になった Malek Qasem Mirza の子）で、ウルミヒはか同州の郡長を務め、一八九七年にハイグラル＝イギーヤになる (Churchill, p. 30)。ミールザー＝サレフ＝ハーンは、モハンマド＝アリー＝ミールザーが皇太子になった年（一八九六年）にハイグラル＝イギーヤになったが、パン問題を解決しえず、七か月で宰相のアミーノッドゥラにより罷免された。当地の大地主の一人 (Picot, pp. 116-17)。
- ⑫ FO, 60/598, Tabreez, No. 20.
- ⑬ FO, 60/598, Tabreez, No. 26, Nov. 7, & No. 22, Sept. 26, 1898.
- ⑭ FO, 60/598, Tabreez, No. 22, G. N. Curzon に「*al-ḥakīm*」小麦のタスマイルは二・六トマンであった (*Persia and the Persian Question*,

vol. 2, N. Y., 1892, p. 480)。

⑮ A. K. S. Lambton, "A Study in Land Tenure: The Case of Ḥājjī Nūr al-Dīn, 1823-47," in *Qajar Persia* (London, 1987), p. 152.

⑯ *Vaqāye'-ye Etlefātīyeh*, p. 554.

⑰ FO, 60/598, Tabreez, No. 22, al-Mā'āsir wa al-Āsār (p. 325) によると、一三〇二年度（一八四一—四五年）の小麦と大麦の物納分は五四・八七三トルヴァール三九インであった。

⑱ FO, 60/598, Tabreez, No. 22, アゼルム、イシャーンはトルシアの穀倉であり、大量の移出能力があったが、道路事情が悪く、運送費が高く、毎年、大量の穀物が倉庫のなかで腐ったとされる (OCR, 1894, XCII, Taabrez, AS, 1440)。

⑲ *Vaqāye'-ye Etlefātīyeh*, pp. 598, 589-90.

⑳ FO, 60/598, Tabreez, No. 21, September 19 and No. 22, September 26, 1898.

㉑ 『カナート イランの地下水路』（論創社 一九八八）、二〇七—二二頁。

アミーレ＝ネザームの罷免と宗教界

採るべき手段をアミーレ＝ネザームはとつたが、いずれも成功しなかった。一八九九年一月の報告によると、パン問題はいまだ解決しておらず、一月九日にもパン騒動がおこっている。①

民衆の間では、ネザーモル＝オラマーをはじめ有力宗教家も含む穀物退蔵者に対する反感がつの一方、有効な手段を講じられないアミーレ＝ネザームに対する不信も高まっていた。英領事

報告によると、自分たちの苦しい状態が緩和されるなら、アラクセス川の対岸の隣人のようにロシアの支配を受けてもよいとまで、多くの人が語っていたという。^②

アミーレ・ネザームとネザーモル・オラマーは宿年のライバルであった。九一年にビーシュカールを罷免されたのは、ネザーモル・オラマーが深く関わっていたとアミーレ・ネザームは理解しており、一方、ネザーモル・オラマーは、州政庁は数千ハルヴァールの小麦を保有しているながら、アミーレ・ネザームはその放出を手控え、民衆の怒りを大量のストックを抱える富裕な宗教指導者に向け、宗教界に対する民衆の反感を煽り、パン騒動を利用して積年の恨みを晴らそうとした、とみなしていた。^③

A・K・S・ラムトンがイラン社会の特徴の一つとして分派抗争をあげているが、それはこの町でも顕著にみられた。先述のように、皇太子に支持されたネザーモル・オラマーは大きな勢力であった。八二年から九一年まで九年間にわたりビーシュカールを動めたアミーレ・ネザームと派閥抗争があったとしても不思議はない。ネザーモル・オラマー邸襲撃にこの町の有力者の夫人三人が加わっていたことが目撃されているが、これは騒動が派閥抗争的性格を強くもっていたことを物語るものといえよう。

ネザーモル・オラマーと宗教界は、アミーレ・ネザームに対し

あらゆる抵抗を試み、その失脚の機会を狙っていた。たまたま九九年三月下旬、同州のアルダビールで一人のモッラーが当地の役人と口論をし逮捕された。この事件は宗教界にとり反アミーレ・ネザーム運動を公然化するための格好の口実になった。彼らは逮捕の不当性を強調し、アミーレ・ネザームを強く非難し、反アミーレ・ネザーム感情を露わにした。彼らは常套手段をとった。州政庁の行為は聖法に対する挑戦であると民衆を扇動し、町は三月二三日に不穏な情勢に陥った。

三月二十九日にはアミーレ・ネザームは市郊外のサーヘブ・ディウアーン庭園に難を避けざるをえなくなった。宗教界はシャール・アミーレ・ネザームの罷免を強く求め、彼がタブリーズにおける秩序回復能力をなくしたとみたシャールは、四月一日（ズル・カアダム）、彼を解任した。^④

① FO, 60/608, Asia Confidential, Tehran, January 9, 1899.

② FO, 60/598, Tabreez, No. 20.

③ *ibid.*; Sadiq al-Molk, *Montakhab al-Tawarikh*, ed. Iraj Afshar (Tehran, 1987), p. 341.

④ A・ラムトン（拙訳）『ペルシアの地主と農民』（岩波書店、一九七六）二六八―六九頁。

⑤ Kasakofski, p. 252.

⑥ *Ma'rif*, p. 256; FO 60/608, Monthly Report from 7 March to 15 April 1899. 同じこと、キラーンでも有能な知事、サーニドマサ

ルタネが宗教家たちの干渉で職を失っている (ibid.)。

ネザーモツとサルタネのパン対策

後任に、フーゼスタン州知事やファールス州知事などを勤めた有力政治家ネザーモツとサルタネ (Hosein Goli Khan-e Mafi Nizari at-Safameh) が任命された。彼は就任をしぶったが、皇太子が数か月間タブリーズを不在にすることとシャーの強い支持を条件に受諾した。皇太子の不在を要求したのは、皇太子の干渉を嫌ったためであり、シャーの命令で皇太子は七月下旬にはテヘランへ向かった^①。

ネザーモツとサルタネは側近の一人をハムセ (Kamseh) 地方に送り、当地の地主の一人から一〇〇〇ハルヴァール (約三〇〇トス (Karas) では政府所有小麦三〇〇〇ハルヴァールを調達 (五トマン) したほか、アゼルバイジャンのハーレセ地の小麦二〇〇〇ハルヴァールを六トマンで購入した。彼は六〇〇〇ハルヴァールの小麦をタブリーズの市民への「手土産」に赴任した。彼は道中を急がず、「手土産」がタブリーズに届くのをまって、一八九〇年七月二〇日 (一三二七年ラビー一月一日)、タブリーズに入った。

着任早々、ネザーモツとサルタネは、市長を更迭したほか、皇太子の侍従や有力なセイエドなどを逮捕または追放し、側近を要職につけ、安いパンのための政治に乗り出した。^③

着任の一〇日後の七月二〇日には、彼は宗教指導者の訪問を始めた。まず、イマーム・ジョムエのハージャーミールザーハサンとアガー宅を訪ねた。イマーム・ジョムエは宗教指導者たちと有力商人 (toyshe) を招いており、この場でネザーモツとサルタネはパン問題の解決のための決意を披露し、協力を要請した。そして、この町の小麦消費量を尋ねた。さまざまな説がでたが、月間消費量は三〇〇〇ハルヴァール、残り八か月分の必要量は二八、〇〇〇ハルヴァールということになった。

パン問題の解決に必要なことは、所要量の小麦の確保および適正価格の維持の二点であった。この席で、ネザーモツとサルタネは、まず自らは当地で土地所有や財産形成の野望など一切有していないことを強調したのち (もともと彼自身も他の知事同様、赴任地のフーゼスタン、ザンジャン、ファールスそしてアゼルバイジャンで地位を利用して大土地所有者になっているが)、^④ 事態解決のために次の方策をとることを表明した。

① ネザーモツとサルタネ自身、所要量の半分の一四、〇〇〇ハルヴァールを負担する。残りの一四、〇〇〇ハルヴァールは地

主たちが各人の能力に応じ州政庁に売却する。

② 州政庁への売り渡し価格は政庁が決定しない。州政庁食糧倉庫 (Anbar-e-Divan) で手形により代金を支払うが、手形は即座にネザーモツ＝サルタネの責任で現金化する^⑤。

③ タブリーズまでの運送費は一ファルサフ (約六キロメートル) あたり二ヘザールとし、代金はサツラーフ (両替商) の手形で倉庫で支払い、割引手数料なしに、現金化しうるものとする。

④ パン屋は自由にパン価を決めてよい。

⑤ ピーシユカール自身の負担分については、地主たちから一切要求しない。

⑥ 地主たちがこれに従わないときには、町に以下の掲示をする。

「余は新來の客であるが、町が必要とする食糧の半分を提供した。これにも拘らず、地主たちは、何の協力もしていない。」

⑦ ネザーモツ＝サルタネ自身の調達先を明らかにした。

先述の六〇〇〇ハルヴァールのほか、さらに彼自身がハムセの地主から購入したものとアゼルバイジャン州政庁が取り立て可能分で八〇〇〇ハルヴァールになる^⑥。

彼らは次の金曜日マレコッ・トツジャール (Marek al-Tojjar 商人頭) 宅で集会をもち、この問題を検討した。そして、ネザー

モツ＝サルタネの指示に従うことにし、放出量の割方を行い、割当額を巻紙 (feta) に書き、全員が署名した。州政庁への売り渡し価格はとくに指示されていなかったが、ハルヴァールあたり一四トマン、パンの公定価格はマンあたり六アツパーシーとした。つまり、一マンあたり小麦は一・四ケラン (＝二八シャーヒー)、パンは二四シャーヒーとなる^⑦。

抛出分の一四、〇〇〇ハルヴァールは一二四人の地主・商人・オラマーに割り当てられた。最低で三〇ハルヴァールから最高で五〇〇ハルヴァールであった。なお、ネザーモル＝オラマーの割当ては一〇〇ハルヴァールであった^⑧。

ネザーモツ＝サルタネはこれに同意し、集荷機関 (Yokate-ye melia) を設け、商人、宗教指導者や地主に信任の厚い三人の人物を委員 (Ashraf-e-Saleh) に指名し、穀物倉庫長 (Anbardar-e Jense-Doulai) に彼の側近のミールザー＝ヘダーヤト＝ハーン (Mirza Hedayat Khan) を任命した。

ネザーモツ＝サルタネはパン屋への小麦払い下げをすぐさま開始した。しかし、パン屋は彼の意に反し、配分された小麦の半分ほどを退蔵してしまった。そのため、パンはすぐに売り切れ、いぜんとしてパン不足の状態が続いた。パン屋組合長 (Kadkhoda-ye Khabazan) は配分された量では不十分であり、かつ公定価格

（一人マンあたり小麦は二四シャヒー、パンは二八シャヒー）ではパン屋は損をすると申し立てた。ネザーモツ・サルタネは再度、宗教指導者や商人、町の名士を皇太子の宮殿に集め、この席でパン屋組合の申し立てを非難し、彼の措置の妥当性を四日間て証明してみせると断言した。

ネザーモツ・サルタネは彼の邸のあるマハッレ（街区）で閉店中のパン屋四軒を借り上げ、パン焼きの実験を行うことにした。

彼は側近の四人をそれぞれのパン屋の責任者に任じた。彼らはパン焼き職人と労働者を雇い、政庁の倉庫から小麦の払い下げを受け、製粉所に運び小麦粉にし、燃料を買い付け、四日目にパン焼きを始めた。ネザーモツ・サルタネはなみなみならぬ熱意を示し、大膳長 (Ahdar-Basiri) を四軒のパン屋に遣わし、パン粉練りやパン焼き、秤量の監督をさせた。結果は、ネザーモツ・サルタネの予想通りであった。店の借料も含め経費のすべてを差し引いて、小麦一ハルヴァールにつき一五ケランの利益があがることが証明された。ネザーモツ・サルタネはパン屋組合長を逮捕、鞭打ち刑に処した後、タブリーズ所払いにし、皇太子の認可を得て、別のパン屋を組合長に任命した。^①

脅迫ビラが貼り出されたほか抵抗はあったが、彼の方策は功を奏し、問題は解決した。

- ① Matfi, pp. 259, 335; FO, 60/612, Tabreez, No. 10, July 27, 1899.
- ② Matfi, p. 259.
- ③ FO, 60/612, Tabreez, No. 10.
- ④ Bandad, vol. 1, p. 453; Churchill, p. 70.
- ⑤ Haji Faraj Sarraf への手形は Tomanesiyan の手形を支払われる。
- ⑥ Matfi, pp. 259, 262-63.
- ⑦ *ibid.*, pp. 333-35.
- ⑧ *ibid.*, p. 264.
- ⑨ *ibid.*, pp. 263-64.

終 わ り に

パン不足と価格騰貴の要因として、まず不作があげられる。しかし、それが主要な要因ではなかった。小麦の絶対量は不足していなかった。

最大の要因は「退蔵」であった。ネザーモツ・サルタネの措置に対するパン屋の対応に退蔵への飽くなき欲望が読みとれるが、退蔵はイランのどの都市でも自明の事実であった。一九世紀末のイランでは、宗教界の有力者たちは大量の穀物を保有する大地主でもあり、小麦買い占めの主役を演ずる者も少なくなかった。タブリーズにおいても、民衆は有力宗教家たちが最大の退蔵者であり、ネザーモル・オラマー一族が「悪」の元凶であることを知っていた。これは町の常識であった。

大地主や商人たちの穀物買い占めが続き、禁令を無視し、彼らはテヘランや外国への輸出を続けており、これもタブリーズへの食糧供給減の一つの要因となっていた。

アミーレ・ネザームは強硬策をとって問題を解決しようとした。彼にとり宿敵ネザーモル・オラマーの勢力を削減し、自らの力を強化するには、彼らによる小麦の退蔵を浮彫りにし、「悪」を退治する自らを印象づけることは、最善の方法であった。ネザーモル・オラマー邸襲撃までは思惑通りに事が進んだが、それ以降は、彼に強い反感を抱いていた反対派の執拗な妨害にあり、彼の施策は成功をみなかった。失敗の主因は、皇太子やネザーモル・オラマー一族など反アミーレ・ネザーム派との抗争に敗れたところにある。

これに対しネザーモツ・サルタネは、「緩やかな方策」をとった。一八九八年のテヘラン騒動では大商人アミーノツ・ザルブが私財を提供し、大地主を説得、小麦を放出させることに成功したが、ネザーモツ・サルタネもテヘラン方式を採った。力で「小権

力」を抑えられないとみた彼は、大量の小麦を「手土産」に赴任し、これを切り札に退蔵者たちを説得し、倉庫を開かせた。また、民衆にも自らの善政をPRしたことが、成功の一因となった。彼は、退蔵者たちが彼の要請を断れないような状況を作り出すという、巧妙な方法を採ったのである。さらに、彼はタブリーズの實力者とはライバル関係になく、あえて彼らを刺激するようなことはなかった。

タブリーズの例に見られるように、「小権力」を力では抑えられなかった。最も簡単に「濡れ手に粟」の儲けができるのは小麦であり、中央の力が弱化した時には同じことが繰り返された。

一九二一年にバフラヴィー朝を建てたレザイ・シャーは中央集権体制を確立するとともに、政権維持手段の一つとして食糧補助政策をとり、安いパンを供給した。この政策は現在も重要政策の一つとして継続され、インフレにも拘らず、パンは安く、また豊富である。